

## 成果の説明書

(氏名) 名和賢美	(学部) 経済学部
<p>1 重要事項</p> <p>2019年度に最も力を注いだのは、前年度に引き続き、「論理的表現力と批判的思考力を主軸とした市民教育プログラム構築に向けた調査研究」であり、関連する教育研究の成果および事業の概要は、以下の通りである。</p> <p>(1) 初等中等教育での教育研究</p> <p>① 高崎経済大学附属高等学校2年生オナークラスへの事前講義(1月28日)</p> <p>下記「アウトプット教室」でチューターを務める2年生オナークラス6名に対し、事前講義を実施。前年度の作文指導講座の授業内容を再確認した上で、同教室での授業の流れや小学生を指導する際の注意点などについて詳しく説明した。</p> <p>② 高崎市立中央小学校6年生への発信力養成授業の開催(2月4日)</p> <p>6年生45名に対して「アウトプット教室：経附生・経大生といっしょに発信力を鍛えよう」という授業を実施。アウトプットの基本について説明したうえで、経附生6名と経大生9名のチューター指導を通じたグループワークにより、小学校国語科で指導される「はじめ・なか・おわり」の定着を図った。</p> <p>本授業は5校時と6校時に実施したが、5時間目に日本語で学んだ内容を、続く6時間目には英語で指導した。このように国語と英語の両面から表現力学習の相乗効果を目指した指導は、全国的にも極めてまれな事例であり、小学生の作文やスピーチに対する苦手意識払拭および論理的に表現する意識強化の一助となった。</p> <p>なお、本授業は附属高のTSUBASAプロジェクト事業の一環である。</p> <p>(2) 高等教育での教育研究：経済学部教養教育委員会日本語部会の部会長(通年)</p> <p>経済学部では、2014年度より1年次生の批判的思考・論理的表現の汎用力の育成を目指す初年次教育科目として日本語リテラシー科目を新設開講したが、本科目の授業内容の検討や担当者の選定などを逐条審議する部会を定期的に主宰した。さらに、次年度に向けて『指導要領2020年版』(99頁)を作成した。</p>	
<p>2 その他の事項</p> <p>(1) 福沢諭吉『学問のすすめ』教材用現代語訳</p> <p>経済学部1年次後期必修科目「日本語リテラシーⅡ」では、上記著作の一部を輪読教材として使用してきたが、学生がより理解しやすい教材とするために、該当部分のオリジナル現代語訳を作成し、全クラスで使用した。</p>	
<p>3 次年度以降の計画・抱負</p> <p>前年度と同一テーマが、最重要課題となる。まず、初等中等教育での教育研究では、附属高や小学校との更なる連携に努めて、「アウトプット教室」事業の拡充を試みることになる。それから、高等教育での教育研究では、部会長を継続し7年目を迎える日本語リテラシー科目の充実に努める。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、全クラスの遠隔(オンライン)授業実現に向けた準備にも早急に尽力しなければならない。</p>	